



TITLE:

訳語論争への再考察(Abstract_要
旨)

AUTHOR(S):

金, 香花

CITATION:

金, 香花. 訳語論争への再考察. 京都大学, 2018, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2018-05-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21243>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	金香花
論文題目	訳語論争への再考察		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本研究は、中国語訳聖書においてキリスト教の神の訳語として「神」と「上帝」が併存している事態への疑問から、これをもたらした直接な原因である訳語論争を再考察し、聖書翻訳とは何か、また翻訳とは何かをより大きな問題意識としつつ、訳語論争への新たな解明を試みるものである。</p> <p>以下、本論文の概略を述べ、それによって得られた成果を最後に示す。</p> <p>まず序章においては、訳語論争に関する今までの主な研究とその問題点を考察し、本研究の目的や方法論について論じた。</p> <p>訳語論争に関しては、論争が行われていた当時から近年に至るまで、英語、中国語、日本語と朝鮮語において様々な研究がなされていた。これらの研究は、論争内容の記述、宣教師研究からのアプローチと翻訳視点からのアプローチの三種類に分けることができる。これらの先行研究によって、訳語論争の歴史的経過自体が非常に明確になっており、また、この論争を翻訳学の視点から分析する必要性も明らかである。しかし、歴史的と翻訳学的のどちらの視点からの研究も、今現在も中国語訳聖書に二つの訳語が併存することに対しては、明快な解釈を与えてくれない。訳語論争に対する考察が、キリスト教史的な視点と翻訳学の視点にそれぞれ分かれているところに、その原因があるのではないかとと思われる。</p> <p>そこで、本研究は、先行研究の中ですでに表れた二つの視点—キリスト教史的視点と翻訳学視点—を融合させ、一つの研究に統合することを試みた。キリスト教の正典としての聖書の翻訳という視点からキリスト教の神の訳語を考察することは、翻訳行為による伝達の歴史と受容者であるキリスト教改宗者の受容の歴史とを含んでいる。このような歴史を翻訳理論の視点で考察することによって、「聖書翻訳」という訳語論争の最も基本的な性格をより適切に論じることができるのではないかとと思われる。</p> <p>以上の目的と方法論のもとで、論文全体を二つの部分に分けて論じた。</p> <p>第一部においては、キリスト教史的視点から訳語論争を論じた。従来の研究においては聖書が中国語に翻訳された場合のみに限定して論じられている場合がほとんどである。もちろん、このような考察は「訳語論争」と呼ばれる論争自体への考察であり、最も基本的に論じるべきことである。しかし、中国語の場合のみに限定して論じるときは、「神」と「上帝」の併存が論争の未解決の結果として解釈される可能性が</p>			

大きい。また、宣教師の間における訳語論争を超えて、受容者の訳語に対する受容を考察する必要性も意識されているが、十分な考察がなされていないと言わざるを得ない。本論文においては、中国語における訳語論争を先行研究に沿って概観した後に

（第一章）、中国語における訳語論争と密接な関係の中にある日本語におけるキリスト教の神の訳語「神」と（第二章）、朝鮮語におけるキリスト教の神の訳語「ハナニム」についての考察を行った（第三章）。従来の研究において、初期の日本語訳聖書と朝鮮語訳聖書が中国語訳聖書の影響を受けたという事実はすでに明らかになっており、日本語訳聖書における神の訳語「神」と朝鮮語訳聖書における神の訳語「ハナニム」が中国語訳における訳語論争と密接な関係にあることも明らかである。本論では、そこからさらに一步踏み込んで、中国語における訳語論争を考察する意図のもとで、日本語におけるキリスト教の神の訳語「神」と朝鮮語におけるキリスト教の神の訳語「ハナニム」を考察した。

日本語においてはヘボン訳聖書から「神」が、朝鮮語においてはロス訳聖書から「ハナニム」が採用され、現在においてもそれぞれの訳語が定着して使用されている。日本語の訳語「神」に関しては、記録に残った論争がなく、日本語においてキリスト教の神の訳語が問題にならないという宣教師の発言を読むことができる。しかし、鈴木範久の研究によると初期の日本人キリスト者たちは「神」以外の様々な表現をもってキリスト教の神を表現していたことがわかる。本論では、鈴木の研究を踏まえ、具体的に植村正久、内村鑑三と海老名弾正が使用した「上帝」を考察し、「神」の使用と比較することを通して、日本語におけるキリスト教の神の訳語「神」が定着するプロセスを考察した。朝鮮語においては、論争の形で訳語問題が存在していたが、それを「ハナニム」を支持する方と反対する方の間の論争として見ることができる。「ハナニム」は、「上帝」＝至高者(Supreme One)、「天主」＝天の支配者(Heavenly Lord Ruler)と「一人の主」＝唯一者(The One Great One)と多義的に理解されたが、しだいに「唯一者」の意味でキリスト教の神の訳語として定着するようになった。「ハナニム」が定着するまで、40年間の神学化作業と10年間ぐらいにわたるキリスト教文献における使用が必要だったのである。

日本語における訳語「神」と朝鮮語における訳語「ハナニム」は、訳語論争における「神」と「上帝」の延長として見るができるが、これらの定着プロセスから以下のことが明らかになった（第四章）。それは、中国語における訳語論争では「神」と「上帝」が二項対立的に論じられていたが、実際の訳語定着から見ると、どちらの訳語もキリスト教の訳語としての役割を果たしていることである。すなわち、宣教師たちは「神」か「上帝」かの論争が統一した訳語を見いだせなかったことを否定的に論じたが、この二つの訳語の併存を訳語論争への妥当な結果として見る事が可能だということである。

訳語論争を日本語と朝鮮語にまで範囲を広げて考察することによって導き出された新しい解釈に対して、第二部においては、このような解釈がなぜ可能なのかを翻訳学における翻訳理論の視点から論じた。宣教師間の論争と、日本語と朝鮮語にまで範囲を広げて訳語論争を考えた時のもっとも大きな差異は、後者が受容者の受容プロセスも含んでいることである。この差異に注目し、まずは翻訳に関わる主体を考察した（第五章と第六章）。

翻訳において「主体」といえば、まず翻訳行為を行う主体である翻訳者を指す。訳語論争はまさに翻訳者の間での論争であり、翻訳者の視点で「どのように翻訳するか」をめぐる議論であった。訳語論争に参加した宣教師たち及び19世紀プロテスタント宣教の初期において、中国語、日本語と朝鮮語に聖書を翻訳した宣教師たちは、英語を母語としていた。このような翻訳者の特徴は、ナイダの「動的等価理論」を借りて分析することができる。これらの翻訳者たちは、聖書言語であるヘブライ語とギリシャ語に対しては、原文言語に属さない、翻訳を経た英語訳文による受容者である。それと同時に、受容者言語である中国語に対して翻訳者は、受容者言語に属さない伝達者である。受容者と伝達者という翻訳者本来の特徴は、翻訳者の内的な性質であり、訳語論争はそれぞれ受容者の側面と伝達者の側面を強調したものとして分析することができる。訳語論争に参加した宣教師たちは、それぞれ意識的に受容者と伝達者の側面を強調したとしても、いずれも伝達者の立場に置かれていたために、実際において宣教師たちの議論は、「原文から訳文へ」という一方向性を帯びるのである。

それと比べると、日本語の「神」と朝鮮語の「ハナムム」の定着プロセスまで視野に入れた訳語論争への新解釈には、受容者における受容者としての視点も入ってくる。ここにおいては、伝達者に加えて受容者というもう一つの主体が現れる。受容者の立場に置かれた状態で翻訳を考える翻訳理論には、柳父章の「カセット効果」理論がある。この理論は、翻訳語とはどのようなものなのか、あるいは翻訳語をどのように理解するのかを問う理論であり、受容者の立場からの考察である。日本語におけるキリスト教の神の訳語「神」の定着は、受容者である日本人キリスト者たちが主体的にそれを受容する努力と、伝達者である宣教師たちが訳語を通して行った伝達行為が繰り返してなされた結果である。翻訳行為を実際に行う「主体」は確かに「翻訳者」であるが、この翻訳行為は、もう一つの主体である「受容者」の受容行為を前提にして行われるのである。日本語と朝鮮語にまで範囲を広げて訳語論争を考察した時に導き出された結論には、訳語論争当時の宣教師たちが主張したような「翻訳者」という主体からの考察と、柳父が強調したような「受容者」という主体からの考察が同時に含まれているのである。

翻訳に関わる主体の考察に続いて、これらの主体が考察する対象である翻訳現象に対して考察した（第七章）。翻訳現象を考察するためには、翻訳と密接な関係の中にあり、また翻訳を理解するにあたりもっとも核心的な概念である「等価」を取り上げ

た。訳語論争に参加した宣教師たちの二つの立場を代表するメドハーストとブーンの議論から、彼らが「等価」に関してどのように考えたのかを論じ、続いて、柳父の「等価」理解を取り上げた。これは、「翻訳者」である訳語論争当時の宣教師たちの主張において「等価」がどのように考えられていたのかと、日本語と朝鮮語にまで範囲を広げて訳語論争を考えた時に「翻訳者」に加えて登場する「受容者」が「等価」をどのように考えたのかを考察するためであった。

具体的には、アンソニー・ピムの「自然的等価」と「方向的等価」を借りて分析を行った。メドハーストは、自然的等価を追及したが、実際には方向的等価になっており、ブーンは最初から方向的等価を追及したとすることができる。メドハーストは意識的に受容者の側面を強調したが、実際には伝達者の立場に置かれたため、一見矛盾するかのような等価理解が現れ、ブーンは意識的に伝達者の側面を強調したことと、実際におかれた伝達者の立場が一致したため、一貫した等価理解が現れたのである。受容者の立場に置かれた状態で翻訳を考える柳父は「方向的等価」と共通な等価理解を持っており、訳語論争に現れる「自然的等価」を批判することにとどまっているが、柳父の等価批判が受容者立場からの視点であることを考えると、この視点は非常に重要であるように思われる。この視点から等価を考察すると、日本語の訳語「神」と朝鮮語の訳語「ハナム」の定着には、「原文から訳文へ」という一方向的等価の性質だけではなく、「訳文から原文へ」というもう一つの方向的等価も働いていることがわかる。

従来の「等価」に対する批判は、大抵の場合、原文言語と訳文言語の他に、この二つの言語が同じく指し示すことができる第三のもの（意味そのもの）が存在するという考えに向けられている。すなわち、言語の表現形式を離れたところに、「意味」自体が認識できる形で存在するという「等価の存在形態」である。日本語と朝鮮語にまで範囲を広げて訳語論争を考察し、それを通して、伝達者と受容者両方を視野に入れることにより、この第三のものという存在形態とは異なる「等価」の存在形態を見いだすことができる。それは、「等価」と翻訳行為の関係——等価と翻訳行為の範囲を同一視しない関係——を通して明らかになるものである。これを明らかにするために、「翻訳する前あるいは最中」、「翻訳がなされた直後」、「訳文の受容」という三つの段階に分けて、「等価」を考えてみた。「翻訳する前あるいは最中」においては、メドハーストやブーンのように、等価を想定あるいは期待する。この時「等価」は、それ自体としては証明できないが、翻訳行為が行われることを可能にする力（翻訳の期待あるいは意志）として現れるのであり、翻訳行為を翻訳行為たらしめ、翻訳者を翻訳者たらしめる根拠である。「方向的等価」は、「翻訳行為が終了した後」、原文と訳文を比較しながら理解した「等価」である。翻訳行為の結果である翻訳語は、受容者というもう一つの主体と出会うことを前提に生み出されたものである。そのため、翻訳行為が終了した後に、「訳文の受容」というもう一つの行為が現れるの

であるが、これが、受容者の主体的な働きである翻訳語理解行為である。ここにおいて、もう一つの方向において「等価」が働くのであるが、「訳文から原文への方向性」として本稿では表現した。それは、原文の意味を完全には表現できないが、「等価」の想定あるいは期待を持って始まった翻訳が生み出した翻訳語を通して、受容者の主体的な働きにより原文が表現しようとするものへ向かう方向性である。翻訳語は原文とまったく同じ指示対象を表現するものではなく、本来は受容者にとってアクセス不可能な原文へアクセスすることを可能にさせる入り口であり、道標である。受容者は、この入り口を通して、原文が表現しようとする意味へ到達する方向性を得るのである。「等価」とは、翻訳行為を可能にする力であり、また読者を原文へ惹きつけることを可能にする力でもある。そのために、「等価」とはそれ自体としてはその存在や実体が証明されるようなものではなく、翻訳行為と翻訳語の理解行為を通して現れるものなのである。

終章では、本論文の内容が次のようにまとめられ、また今後の研究課題が示された。

第二部では翻訳に関わる主体と、翻訳現象におけるもっとも核心的な概念である「等価」という二つの要素を通して、第一部でキリスト教史的な考察を通して出された訳語論争への新しい解釈を分析した。ここで明らかになったのは、キリスト教の神の訳語としての「神」と「上帝」が、必ずしも二項対立的ではなく、それぞれの訳語の定着プロセスが示すように、どちらの訳語も可能であったということであり、そこには、伝達と受容という二つの行為によって、二つの方向における伝達者と受容者の主体的な働きがあることである。このような相互の働きは、一回のみで完結するのではなく、絶えず反復されるのであり——聖書翻訳の反復——、キリスト教の神の訳語は、このような二つの方向における伝達と受容の反復の動きの只中に存在しているのである。

以上論じたように、本研究の意義は、訳語論争をキリスト教史的視点と翻訳学視点の両方から論じ、今までの訳語論争研究では論じられていなかった新しい解釈の可能性とその妥当性を見出したことにある。また、訳語論争を「聖書翻訳」そのものという視点から論じることを通して、「聖書翻訳」を体系的に論じる必要性が明らかになった。

(論文審査の結果の要旨)

聖書翻訳はキリスト教にとってつねに中心的な課題であった。キリスト教の正典が必ずしもいわゆる原典を意味しなかったことは、古代の70人訳聖書やヒエロニムスのラテン語訳聖書(ウルガタ)が示すとおりであり、この意味で、キリスト教は翻訳の宗教と評することができる。これは、宗教改革期以降のルター訳聖書や欽定訳聖書からも例証可能であり、聖書翻訳の意義は、19世紀の東アジアに関しても妥当する。本論文は、以上の聖書翻訳の歴史を背景に、中国の訳語論争(エロヒムやテオスの訳語として、「神」と「上帝」のいずれを採用するかをめぐる論争)を中心に、日本語訳聖書と朝鮮語訳聖書を含めた東アジアの聖書翻訳の問題を論じた、意欲的な論考である。

本論文は、序章と終章以外に2部7章から構成されている。第一部では、まず19世紀の中国における訳語論争が分析され、その争点が明確化される(第一章)。第二章では、日本語訳聖書における訳語「神」の定着過程が明治の代表的なプロテスタント指導者の一次文献によって明らかにされ、第三章では朝鮮語訳聖書における論争と訳語の意味の変遷を経て、「ハナニム」が訳語として確立される経緯が説得的に示された。以上に基づき第四章では、訳語論争に対する後述のような新しい解釈が展開される。第二部では、第一部の歴史的考察に基づく訳語論争の新しい解釈を、現代の翻訳理論によって検討し、その妥当性を理論的に論じることが試みられる。歴史的考察と理論的考察を有機的に統合することによって、本論文は翻訳論争研究を大きく前進させたと言えよう。以下、本論文の優れた内容について、論点をしばって説明を行いたい。

まず本論文では聖書翻訳に関連した膨大な一次資料と二次文献(中国語、朝鮮語、日本語、英語)が考察対象とされるが、訳語論争にせよ、翻訳理論にせよ、問われるべき諸テーマに関して、従来の研究の到達点と言える先行研究が選び出された上で、この先行研究との緻密な対論が行われている。本論文によって示された先行研究の包括的で的確な整理と分析は、それだけでも、重要な研究成果と言うべきものであって、それを基盤にすることにより、本論文の立論は極めて説得力のあるものとなっている。

たとえば、第一部では次のように議論が進められる。19世紀中国での聖書翻訳における訳語論争では、欧米の宣教師が、神と上帝のいずれに訳語を統一するかをめぐる激しく長期にわたる論争を行った。しかし結果として、訳語について合意に達することができず、訳語「神」を採用する神版と「上帝」を採用する上帝版との並存に終わった。従来の研究においても、論争の争点と歴史的な論争過程の明確化に関してはかなりの解明がなされたが、本論文は、この中国での論争が日本語による聖書翻訳と朝鮮語による聖書翻訳とに対して歴史的に関連していることを詳述した上で、これら三つの言語による聖書翻訳を一連のプロセスと捉えることによって、中国での訳語

論争への再考察が試みられた。それにより、一見すると失敗に終わったかに見える中国での訳語論争が、神版を受け継いだ日本語訳聖書と上帝版を受け継いだ朝鮮語訳聖書という次の展開過程の中に位置づけるとき、それは決して失敗だったのではなく、むしろ、翻訳聖書の受容者が信仰対象の理解をめざして努力する中で、神と上帝のいずれの訳語も訳語としての機能を十分に果たすことができた、また現に両者とも訳語としての機能を果たしている、という新しい解釈が提示された。三つの言語において行われた聖書翻訳を一続きの反復された翻訳プロセスとして捉えることによって、訳語論争の意味を積極的に評価できるという本論文の解釈は、聖書翻訳の理解にとって重要な研究成果である。

しかし、本論文の意義は訳語論争の歴史的理解について新しい解釈を提示したことにとどまらない。第二部では、この歴史的理解についての解釈を現代の翻訳理論によって理論的に検討することが試みられた。ポイントは、聖書翻訳者の位置づけと、それに関連した原文と訳文の等価とを、どのように理論化するのかであり、ここでも先行研究との対論が有効に機能している。論者はナイダ、ピム、柳父らの翻訳理論との対論によって、等価を原文と訳文との間に、あるいは翻訳者と受容者との間に成立する双方向的なプロセスとして分析できることを示した。これによって、聖書翻訳は翻訳者が原文を訳文へと翻訳することで完結するのではなく、訳語は、受容者がそれを訳語として受容することによってはじめて、本当の意味で訳語として機能することが明らかになった。これは、第一部における三つの言語による聖書翻訳を一つのプロセスとして解釈する際に、受容者の理解する努力が重要な意味をもっていたことに対応する。聖書翻訳における等価とは翻訳過程の外に位置する静的な同一性に準拠することによって可能になるのではなく、翻訳者から受容者へ、そして受容者から翻訳者へという双方向的な動的なプロセスの中で生成するものなのである。

もちろん、本論文についてもいくつかの問題点が指摘されねばならない。たとえば、19世紀の訳語論争、聖書翻訳一般、翻訳理論一般という3つのレベルの相互関係についての考察が十分に深められていないなど、議論はしばしば平板なものにとどまっている。しかし、こうした問題点については論者自身よく自覚しており、今後の研鑽において克服することが期待できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2018年3月22日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。